



陽気だより

No94

2015.1.15

●ホームページからも「陽気だより」
最新号・バックナンバーをご覧くださいませ

<http://yotokusha.com/>

図書出版 養徳社 〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL 0743 (62) 4503 / FAX 0743 (63) 8077

養徳社

検索

昭和34年9月号から

「陽気」は、昭和24年4月の創刊、今年で66年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

陽気門

柏木 庫治

(東中央大教会長
昭和三十四年当時)

鬼門は「善」

三年前の春のある日のことである。〇〇分教会の大橋君が、シャンとした紳士とともに私を訪ねてくれた。

紹介されたが、外材を扱う問屋のご主人、木村さんである。

「木村さんのご長男さんが奥さんのお里に行かれるのです。直接参りますと方角が悪いので、鬼門よけのために三、四カ月、渋谷の方面に住まわせたいのだそうです。しっかりした宅に預けたいというので、教会に頼みにみえました。

先生を思い出しましたので、お願いにあがったのです。ご無理なお願いでございますが、どうぞ坊ちゃんを預かっていただきたいと思います」

この頼みを聞いて、私の心

は憤りを感じた。叱責の念が胸に燃え、その声は荒々しかった。

「大橋君、君は東京でも立派なお道の先生と想っていたが、いつ天理教を止めたのかね。天理教人ならそんな馬鹿な頼みをする筈がないと思う。

〃月日がありてこの世界あり世界ありてそれ〳〳あり身の内ありて律あり 律ありても心定めが第一やで」

神の造った世界に鬼門なんかある筈がない。あつたら神の世界ではないのだ。門ありとせば陽気門か幸福門だろうよ。〃心定めが第一やで〃神の心と我が心を結ぶ人には鬼門はない。

神の世界を知らず、自分だけで住む世界を造っている人があるなれば、その人が勝手に自分の心に鬼門を造っているかも知れん。

そんな人に天理を説いて、その人の心に鬼門をなくして上げるのが道の人の勤めである。君は本来の道のつとめを何処かに置き忘れて、鬼門あ

りとして僕のところへ頼みに来た。見当違いではないか。鬼門はないのだから、よける必要もないではないか」

私は更に語気荒く言葉を吐いた。

「人に好き嫌いの甚だしい人がある。嫌いな人のいる方向は鬼門だ。春夏秋冬とは流れる。冬を嫌う人がある。その人には冬は鬼門だ。東西南北、万一北を嫌う人があるなれば、その人には北が鬼門であろう。

万人を好む人、春夏秋冬いづれも各々の役割において万物を育て、人類を幸福にする理をもつて、その理を嬉しく受け入れる人。東西南北いたるところに青山あり、いづれのところにも人類を養う資源あり。われらの友人は満ち満ちていると四方八方をありがたく拝する心の持ち主。この種の人は、どこを探しても鬼門はない。方向にあるのではない。方位も時もある人、その人のためには総て善である」

神妙に聞いてくれた大橋君は、まことにその通りと、うなずいてくれた。

木村さんは両手をついて、よいことを聞かせてくださっ

たとお礼を言われた。私は語気の荒さを詫びた。そして言うた。

「頭ではお分かりいただいたと思うが、まだ身につけてないと思う。分ったものから合わせよというのが道ですから、このたびはお預かりいたします」

と言つて、私は坊ちゃんのお世話をさせてもらった。

運命の計算の年

女の三十三、男の四十二を厄年と言うてきた。いろいろと思わぬ不祥に引つかかって、厄だからと安易に過ぎ、そうして、これで厄のがれをした、と諦める人を見ることがある。

あの人は厄に勝った、という声を稀に聞くことがある。その人が幸運に恵まれて躍進したことを語っている。

厄年は人に不祥事も与えるが、幸運・躍進も与える。数に多少の差はあるらしいが、かように考えてくると、厄年はないということになる。前厄後厄という言葉があることから考えてみると、女は三十三歳のころ、男は四十二歳のころ、ということだと私は思

う。

厄年ではなくて、人生の運命の第一回の計算の年とでも私は言いたい。それまでに積んできた誠と埃を一応運命の中で計算されるのだ。

埃を積んだ人の数が九割以上も占めるとみえる。この人たちのためには正に厄年であり、数少ない誠の人が厄に勝ったと称せられる人だ。幸運に恵まれて運命に躍進を見る。筆者は過ぎし跡を振り返ってみる。厄に勝たせてもらった標本と、今更ながら感謝せざるを得ない。

誠の男女に厄年なし。日々の心の歩みが、その有無を決するのだ。

今年の心定め

芦田 泉

(芝白金分教会長
昭和二十七年当時)

新年を迎え、今年も日本も賠償第一年(第二次大戦で日本が侵略した国々への賠償が始まった年)を迎えて、新たな苦難の第一歩を踏み出す年である。

お道も教祖七十年祭を数年後にひかえて、いよいよ本格的活動に拍車をかける年である。いろいろと困難が予想される。お互いお道のものも信仰に拍車をかければかけるほど、神様のお仕込みも熾烈に

なってくる。予想もつかない節を次から次へとお与え頂くであろう。

われわれ道のようにほくは節に処する心構えを十分に練っておかねばならない。よく世間には「俺はどんなことが起きてもビクともしない」と大言壮語している方を見受けるが、案外そういう方がサアという時になると尻に帆をかける人が多いように思う。節に処する心というものは節にぶつかってからは遅すぎるのだ。日々にしつかりした道すがらを歩ませて頂いて、しつかりした理の伏せ込みをさせてもらっていないと節は乗り切れるものではない。普段は昼寝をしておいて、サアという時だけ頭痛鉢巻で節をお道らしく上手に受けさせて頂くと思っても、これは無理な相談で、節を上手に受けるどころか、すっかり精神を倒してしまうのがおちだ。

道の者には節はつきものがあり、この節によって次への飛躍を与えられることを天が許されていることを思案する時に、お互いはいかにこの節というものの受け入れ態勢が大切なものかということをし

みじみと味わねばならないと思う。しかも、この受け入れ態勢は一朝にして成るものではなくて、日々の勤めの中に自然にお与え頂くものであることを思案させて頂くことによって、日々の勤めがいかに大切であるかということをお案せずにはおられない。成人に依じてお見せ下さる節の模様。考えれば考えるほど、一つ一つが神様のご慈悲である。節から芽を出せと神様はお教え下さっている。節なくしては成人はあり得ない。

本年こそは教内教外を問わず、あらゆる角度から見て種々の節をお与え頂くであろうが、伸びる者、伸びざる者の分岐点は、この節の受け方一つにある。言い換えれば、伸びる力伸びざる力は節にあるのではなくして、受け方一つにあるということである。

お互いは理の親をめぐらして精いっぱいの日々を通して頂く中に、どんな節をも上手に乗り切らせて頂ける力をお与え頂くのだということ、新年の冒頭にあたり今一度しつかり心におさめさせて頂いて通らせて頂くのではない

か。(『陽気』昭和二十七年一月号より)

春季大祭発刊

新・樺太伝道物語

—サハリンへ渡った伝道者たち—



旧樺太・豊原市内

極寒の地・樺太(サハリン)には終戦前まで五十五カ所の教会があった戦後七十年 新たに掘り起こした樺太伝道の歴史と布教師たちの信仰

A5判・224頁・定価=1,200円+税
天理教北海道教務支庁編 養徳社刊

『陽気』定期購読

定期購読料金 1年分
3,420円(送料込)

お 店まで買いに行くのが大変。忙しくて購入するのを忘れた。定期購読はそんな手間を省きます。毎月20日前後にご自宅宛に発送いたします。(例:2月号は1月20日)

購読に関する問合せ先 ☎0120-920-398 養徳社 業務窓

Facebook で最新情報をチェック!
<https://www.facebook.com/yotokusha>

この「陽気だより」を支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用くださいますよう、お願い申し上げます。
<書籍・陽気のご購読方法について>前払いでお願いしております。お近くのゆうちょ銀行に備え付けの振込用紙をお使い頂き、[住所、氏名、電話番号、書名(陽気希望月号)、冊数]を明記の上(振替口座番号00990-3-17694番 加入者名(株)養徳社)へご送金ください。手数料はおお客様負担となります。ご入金を確認後、速やかに商品を発送させていただきます。ご不明な点は養徳社までお問い合わせ下さい。フリーダイヤル0120-920-398 養徳社 業務部